

10 . 竹と風 (ミンダナオ)

昔々、地上がまだできたばかりで若かった頃、マホマナイという美しい女神がいましたが、彼女には、同じように美しい娘、プロトカンがいました。

マホマナイは森と、すべての木、植物、動物の女神でした。しばしば、母とその娘は、彼らの領土を歩き回りました。そこでは、木々や花が、彼女らの際立った美しさに敬意を表して、彼女らの前では、頭を下げました。木にとまっている鳥たちは、女神とその娘が、下を通る時はいつも、甘い愛の歌を歌いました。そして、幸せなふたりの周りを、誇らしげに羽ばたき、彼らの美しい羽は、花びらが踊っているかのように見えました。

そんなある日、マホマナイとプロトカンは、平穏に、色づいた森を歩いていました。ところが、その様子を密かに、背後の茂みの中から、4人のすてきな若い兄弟が見ていました。兄弟たちのひとりには名前をレプル・エロダンと言い、しとやかなプロトカンを見ると、すぐに彼女に恋してしまいました。

次の日、愛らしいプロトカンが林を歩いている間に、花に微笑みかけ、鳥や蝶たちと遊んでいますと、レプル・エロダンは遠いところから彼女を見ていました。彼はプロトカンの自然の美しさに驚き、もはや彼女から離れてじっとしていられませんでした。

彼はすぐに彼女に近づき、彼の限りない彼女に対する愛を告白しました。プロトカンは若いすてきな男性の告白に、おだてられました。うぶな若い少女が、そんな素敵で、たくましい男の美しい言葉に、魅了されないでいられるでしょうか。

レプル・エロダンは、その若い少女の手をしっかりと握りました。プロトカンは、すぐに彼女の体を通して、暖かなほてりが湧いてくるのを感じました。彼女はすぐにめまいを感じ、愛によって盲目になりました。すてきな見知らぬ人はプロトカンを彼の腕で引き寄せ、彼女を森の外に連れ出し、愛によってポーとした彼女にショックを与えました。「私について来なさい。」と彼は言いました。「地が提供してくれるたくさんの素晴らしい光景をとらに見、そしてその経験を分かち合いたいよう。」

プロトガンは、レプル・エロダンの輝く暖かさと優しさに圧倒され、興奮して、彼女は彼と共に行くことをためらいませんでした。しかし、彼女の

情熱によって、彼女は母に許可を頼むのを忘れていました。

そしてすばらしい多くの日と多くの夜の間、プロトカンと彼女の新しい恋人は、土地を見て回り、自然のいづきもたらす光景を、感嘆して見ていました。彼らは、空にまで届いている滝を見たり、頂上に輝く白い雪をいただいている荘厳な山を見たり、陸や海や空にいる不思議な素晴らしい生き物を見ました。彼らは、色鮮やかな虹や、大きな渓谷、緑豊かな低地を見ました。それは二人にとって、素晴らしく、忘れられない経験で、お互いの永遠の愛を固めるものとなりました。

しかしふたりの若者が旅行を楽しんでいる間、プロトカンの涙ぐんだ母親は、人に言えない苦しみを味わっていました。彼女のたったひとりの娘は彼女の意志に反して、誘拐されたのではないか、あるいはもしかすると殺されたのではないか。過去には、プロトカンは先ず母親の許可を得ないまままで、どこにも行ったことがなかったのです。

マホマナイは、行方不明の娘を、高い所も低い所も、彼女は山の頂上、低地の底や森とジャングルの隅から隅まで捜しました。しかし、毎日が、プロトカンの形跡も、彼女の叫びもないまま過ぎ去り、取り乱した母は、娘の運命を恐れるようになり、最悪のことが娘に起こるのではないかと恐れしました。

その間に、冒険の旅で疲れきったレプル・エロダンとプロトカンは小さな水晶のように輝く小川のそばに、休むためにとまり、あわ立つような小川から新鮮な水を飲み、お互いの腕の中で休みました。

しかし、そのふたりが目を閉じて間もなく、プロトカンの母親が彼らを見つけました。彼女は娘がまだ生きていたのに安心しましたが、娘が見ず知らずの男と、何も告げないまま出て行ったことに激怒しました。プロトカンとレプル・エロダンは怒っている女神に直面して、立ち上がりました。

マホマナイは、怒りを抱いて、娘に叫ばないわけにはいきませんでした。「よくも、私の許可なしに、出てゆけたねえ！あなたのやったことが、どれほど私を苦しめたか、わかっているの。あなたのががままと無神経さによる代価を払ってもらおうわ！」女神の涙であふれた目は、震えているプロトカンに向けられて、紅潮してきました。「今から先、あなたは地を勝手に歩き回る自由はありません。あなたをいつも見るのできる宮殿に残っていないければなりません。」

フィリピンの神話と伝説

白い煙の一吹きによって、プロトカンはたちどころに、美しい少女から、高く細い真っ直ぐな竹に変わりました。

レプル・エロダンは、その場に立ち尽くして、恐れのために動けなくなり、怒った女神によって、自分にはどんな運命が用意されているのか、心配していました。

マホマナイは、震えている若い男を指差し、言いました。「私はあなたが、二度と私のかわいい娘に触れることを禁じます。私はあなたの姿を見えなくします。」白い煙が、びっくりしている若い男を覆い、そして、女神は続けました。「私はあなたを風にし、この地を歩き回ったことを永遠に呪います。だから、あなたは二度と私の娘に触れないのです。」

その白い煙は空中に消えて、すてきなレプル・エロダンは、もう二度と見えなくなりました。女神は振り返って、彼女が力を入れて行った悲しい出来事を沈黙考するために、彼女の愛した森を見ました。

プロトカンとレプル・エロダンは、もはや人間ではありませんが、彼らはお互い永遠の愛を誓いました。そして女神の怒りは、その誓いを実行することを防ぐことはできませんでした。風は、彼の愛する竹にぴったりくっつき続けますし、甘く、優しく抱いて、彼女をひとりでほっておきませんでした。

今日まで、風が通り過ぎると、竹は優雅に曲がり、揺れて、ため息をつき、喜びを表わし、風の温かな抱擁を感謝し、共に、永遠に約束を守っているのです。